

新翻訳聖書の魅力

—3 割わかるっておきの話—

住谷 眞

初めに

埼玉は、わたしの属しております日本キリスト教会の神学校が川越にあり親しんでいる土地です。この地で今回このような懇談会でお話をさせていただくことを喜んでおります。万葉集の巻 14 の 3380 番に「埼玉の津に居る船の風を疾み綱は絶ゆとも言な絶えそね」

(さきたまのつにをるふねのかぜをいたみつなはたゆともことなたえそね) という東歌があります。利根川の港に泊まっている舟が烈しい風に綱が切れ絶えることがあっても愛の言葉はいつまでも絶えないで欲しいという意味の歌があります。遠い万葉の時代の埼玉の地の人の情熱が伝わる歌です。聖書は神の言葉としてももちろん絶えることはないのですが、わたしも 2010 年の夏以来、この東人のような思いをもって、嵐のようにめくるめく激動する世界にあって神の言葉である聖書の言葉をこれからの同胞によくわかる日本語に翻訳するために微力ながら努めてまいりました。そのような者として今日は、新翻訳聖書の魅力について、3 割と掲げましたが、少しばかりお話させていただきたいと思います。

1. マタイによる福音書

1) 3 : 7 「まむしの子らよ」→「毒蛇の子らよ」

従来の訳は口語訳、新共同訳、新改訳とも「まむし」と訳されているが、「マムシ」はクサリヘビ科マムシ属で日本固有のもの。クサリヘビ科「エキドノス」は正確には「くさりへび」のこと、これを註にし、本文には毒蛇とした。

2) 3 : 12 「手に箕を持って」→注付き「農用フォーク」

従来の訳はすべて「箕」となっているが、正確には「農用フォーク」である。食器のフォークは農用の大きなフォークが小型化したものであり、本来フォークと言えば農耕具を指した。流石に本文に「フォーク」とは入れられないので、ここは「箕」を残し、註に「農用フォーク」と記した。

3) 6 : 9 「あがめられますように」→「聖とされますように」

従来の訳(文語訳、口語訳、新共同訳、新改訳)はすべてハギアスセーターを「あがめられますように」と訳しているが、これは「聖とされますように」というのが正しい。今回の訳は、そのように正しくされた。

4) 6 : 19 「虫が食ったり、さび付いたり」→「衣蛾や虫食いが損ない」

新翻訳 「自分のために地上に宝を蓄えてはならない、そこでは、衣蛾や虫食いが損ない」

新共同訳 「あなたがたは地上に富を積んではならない。そこでは、虫が食ったり、さび付いたりするし、また、盗人が忍び込んで盗み出したりする。」

口語訳 「あなたがたは自分のために、虫が食い、さびがつき、また、盗人らが押し入って盗み出すような地上に、宝をたくわえてはならない。」

新改訳 「自分の宝を地上にたくわえるのはやめなさい。そこでは虫とさびで、きず物になり、また盗人が穴をあけて盗みます。」

従来の訳は「セース」を「虫」と訳しているが、衣類を食べる衣蛾（いが）のこと。

2. マルコによる福音書

1) 1:10 「水の中から上がるとすぐ」→「水の中から上がられるとき」

新翻訳 「そしてすぐに、水から上がられるとき、天が裂けて、霊が鳩のようにご自分の中に降って来るのをご覧になった。」

新共同訳 「水の中から上がるとすぐ、天が裂けて“霊”が鳩のように御自分に降って来るのを、御覧になった。」

口語訳 「そして、水の中から上がられるとすぐ、天が裂けて、聖霊がはどのように自分に下って来るのを、ごらんになった。」

新改訳 「そして、水の中から上がられると、すぐそのとき、天が裂けて御霊が鳩のように自分の上に下られるのを、ご覧になった。」

従来の訳は、イエスの受洗に伴って起こった出来事が一連の水から上がった後の出来事として訳している。しかし、原文は「彼は見た」という短い主文に三つの現在分詞がかかっており、これは主文の動詞と同時に起こった出来事を指す。すなわち、彼が見たとき、水から上がりつつ、天が裂けつつ、鳩が下りつつあったのである。マルコのこのような、ダイナミックな映画的、カオス的な描写を今回は訳し取っている。

3. ヨハネによる福音書

1) 1:3-4 「言の内に命があった。」→「言のうちに成ったものは、命であった。」

新翻訳 「すべてのものは言によって生じた。言によらずに生じたものは何一つなかった。言のうちに成ったものは、命であった。」

新共同訳 「万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。言の内に命があった。」

3節終わりの「成ったもの」を新翻訳では、従来3節の文につなげて訳していたが、ネストレ・アーラント28版の本文に従い、4節につなげて訳している。その結果、3-4という節渡りとなった。これがオリジナルな読みであると考えられる。

もっとも、本節を含め3-5節までを多数説は、創造における命の出現と解するが、わたしは、これはみ言の受肉における地上のイエスの命のことと理解する。成ったものは、中性単数形の関係代名詞が使われており、これはヨハネの手紙一1:1に対応し、そこでもこれは受肉のイエスを指している。「この命は人の光であった」は、9節の「光は世に来て、すべての人を照らすのである」で敷衍されており、地上の光としてのイエスを指す。「光は闇の中で輝いている」現在形であって現在の状態を示し、「闇は光に打ち勝たなかった」は、アオリスト形として光として地上のイエスが十字架と復活とによって闇に勝利したことを意味する。従って私見では、1-5節においていわばオペラの序曲のように、これから語られる言なるイエスの現在までのことが予告されているのである。アリストテレスが詩学で言うところのプロ

ロゴスである。

2) 13 : 12 「席について」→「横になって」

新翻訳 「こうしてイエスは弟子たちの足を洗うと、上着を着て、再び横になって言われた。」

新共同訳 「さて、イエスは、弟子たちの足を洗ってしまうと、上着を着て、再び席に着いて言われた。」

口語訳 「こうして彼らの足を洗ってから、上着をつけ、ふたたび席にもどって、彼らに言われた。」

新改訳 「イエスは、彼らの足を洗い終わり、上着を着けて、再び席に着いて、彼らに言われた。」

小さなことだが、当時の食事は、横臥してとった。「席」と訳すとテーブルの椅子に着くような現代的なイメージになる。原語のギリシア語（アナピプター）は「横たわる」という意味である（例 ユディト記 12 : 16）。『ユディト記』のパイロット版は、「席に着いた」となっている。

3) 21 : 17 「愛する」→「慕う」

『三度目にイエスは言われた。「ヨハネの子シモン、私を慕っているか。」ペトロは、イエスが三度目に「私を慕っているか」と言われたので、悲しくなった。そして言った。「主よ、あなたは何もかもご存じです。私があなたお慕いしていることを、あなたは知っておられます。』

イエスは一回目、二回目 「わたしを愛するか」と問う。この愛するは「アガパオー」という言葉である。これに対しペトロは二回とも「フィレオー」という言葉で応える。アガパオーという言葉は、知的、意志的な愛を意味する。これに対し、フィレオーはヨハネ文書においては教団における友（フィロス）としての愛、友愛を意味する。ペトロは、この言葉で二回、応答しているのに、三回目にその言葉を用いてイエスが問い返してきたことに、悲しくなったのであって、「三回も」問われたことに心を痛めたのではない。実際、原語は「三度も」ではなく「三度目」が正しい（21 : 14 と同じ言葉）。

従来の訳は、アガパオーとフィレオーに訳語の区別をしていないが、本訳ではフィレオーを「いとおしむ」「慕う」と訳してアガパオー（愛する）と区別を始めて試みた（5 : 20、11 : 3、11 : 36、15 : 19、16 : 27、20 : 2、21 : 15、16、17）。（例外 12 : 25）

4. 「イエス・キリストへの信仰」→「イエス・キリストの信実」

近年の新約学では、パウロ神学における神の義の生じる実在根拠として解される「の」の属格を、従来のように対格的（対格的属格）にとり「イエス・キリストへの信仰」として理解するのではなく、主格的に取り「イエス・キリストが貫いた信実」と理解することが通説となってきた。その新しい知見を取り入れた訳になっている。ちなみに従来の理解は、別訳として欄外に入れられている。

「信仰」と訳される言葉は、ギリシア語でピステイスであるが、これは「信仰」「信実」「誠実」「忠実」とも訳される。さすがに、「イエス・キリストの信仰」とまでは訳せないので、

「信実」と訳されている。「信実」は「真実」と同音異義語で紛らわしいが、辞書にある言葉である。

このような新機軸は、宗教改革の「信仰義認」の立場から見ると、異議が出る可能性があるが、それは、この箇所解釈史の問題であって、当該箇所の正しい理解であるかということとは別の事柄である。また、ローマの信徒への手紙 3 章 22 節を見ると、「信じる者」にこの神の義が及ぶとあるので、「信仰義認」が否定されるわけではない。イエス・キリストに対する人間の信仰は義の受容器官であるので、ここでそのことを認めることができる。

このような主格的属格に立った訳は、23 節「その信実」にも打ち出され、欄外に「信仰」という別訳が置かれている。また 26、27、28 節では、本文に「信仰」、別訳が「信実」となっている。これは、どこまでが、「イエス・キリストの信実」であり、どこまでが「イエス・キリストへの信仰」なのか、まだ学者の間で意見が分かれており、またパウロ自体も曖昧かつ流動的である（実際、30 節以降は明らかに人間の側の「信仰」となる）ともあって、本訳では、主格的属格の訳としての採用については、慎重で限定的であることを示している。

1) 3 : 22

「それは、イエス・キリストの信実による神の義であって、信じる者すべてに及ぶものです。そこに差別はありません。」

同じ理解に立ったパウロ書簡の他の箇所

*ガラテヤの信徒への手紙

2 : 16 「しかし、私たちは人が律法の行いによるのではなく、イエス・キリストの信実によるのでなければ義とされないと知って、私たちもキリスト・イエスを信じました。それは律法の行いではなく、キリストの信実によって義とされるためです。なぜなら律法の行いによっては誰一人として義とされないからです。」

別訳が「の信仰」「への信仰」「信仰」となっている。また 2 : 15-21 節の見出しも「キリストの信実によって義とされる」となっている。

2 : 20 「もはや私が生きているのではなく、キリストが私の内に生きておられるのです。私が今肉体において生きているこの命は、私を愛し、私のためにご自身を差し出された神の子の信実によるものです。」

別訳が「神の子の信仰」「神の子への信仰」となっている。

3 : 22-26 「しかし聖書は、すべてのものを罪の下に閉じ込めました。それは、約束がイエス・キリストの信実によって、信じる人々に与えられるためです。23 信実が現れる前は、私たちは律法の下で監視され、閉じ込められていました。それはやがて信実が啓示されるためでした。24 こうして律法は、私たちをキリストに導く養育係となりました。それは、わたしたちが信実によって義とされるためです。25 しかし信実が現れたので、私たちはもはや養育係の下にはいないのです。26 なぜなら、あなたがたは皆、信実によってキリスト・イエスにあって神の子だからです。」

別訳「信仰」となっている。

*フィリピの信徒への手紙

3 : 9 「キリストの内に見いだされるためです。そのとき、わたしが持つのは、律法によるわたし自身の義ではなく、キリストの信実による義、その信実に基づく神からの義なのです。」

別訳が「キリストの信仰」「キリストへの信仰」「信仰」となっている。
そこでは3:1-9節の見出しも「キリストの信実による義」となっている。

同じ理解に立った第二パウロ書簡の他の箇所

*エフェソの信徒への手紙

3:13 「キリストにおいて、私たちは、キリストの信実により大胆に、確信をもって
神に近づくことができます。」別訳「の信仰」「への信仰」となっている。

5. ローマの信徒への手紙

9:5b 「キリストは...ほめたたえられる神」→「神は永遠にほめたたえられる方」

ここは、新約聖書における、またローマ書における解釈の難所として知られる箇所である。

新翻訳 「キリストは万物の上におられる方。神は永遠にほめたたえられる方、アーメン」

新共同訳「キリストは、万物の上におられる、永遠にほめたたえられる神、アーメン。」

口語訳 「万物の上にあります神は、永遠にほむべきかな、アアメン。」

新改訳「このキリストは万物の上であり、とこしえにほめたたえられる神です。アーメン。」

ここの解釈について詳しく立ち入る余裕はないが、パウロの真正書簡において、パウロがキリストを「神」と言う箇所はどこにもないので、新改訳、新共同訳のように理解することはできない。口語訳は、文法的にそのように訳すことはできない。本文に採用された訳が文法的にも、意味としても正しい。この場合、「神」は「父なる神」となる。

6. コリントの信徒への手紙（二）

1:23 「まだコリントに行かずにいる」→「コリントに行かなかった」

新翻訳 「あなたがたを思いやって、もはやコリントに行かなかったのです。

新共同訳 「わたしがまだコリントに行かずにいるのは、あなたがたへの思いやりからです。」

口語訳 「わたしがコリントに行かないでいるのは、あなたがたに対して寛大でありたいためである。」

新改訳 「私がまだコリントへ行かないでいるのは、あなたがたに対する思いやりのためです。」

従来の訳は、コリント訪問に「まだ行っていない」ということで、訪問は未来に延期されている。現に、新共同訳の見出しは、「コリント訪問の延期」となっている。しかし、原文は「もはや行かなかった」という過去におけるコリント訪問の中止の理由が語られているのである。従って、従来の訳は文法的に誤訳である。専門的になるので、詳論は避けるが、パウロは、第一コリントと第二コリントの間いわゆる中間書簡（涙の手紙）と呼ばれる手紙を書いている。これは、2:4で知られる。今日、これが、コリント（二）の10:1-13:12までの部分であると考えられている。この手紙でパウロは、コリント教会でまた起こった問題の対処のために三度目の訪問を予告した。13:2の「再びそちらに行ったときには、容赦しません」がそのことを指している。しかし、コリントの人たちが悔い改めたので、その訪問を中止し

たことが第二の手紙のここで語られているのである。第二コリントは、従って先に、後から書かれた手紙があって、後にその前に書かれた手紙が編集されている。このつじつまを合わせるために、従来の訳は、「まだ行っていない」ことにして、後で「今度行ったら容赦」とするわけである。実際、13:2で「容赦しません」と訳されている言葉と、1:23の「思いやっ」と訳されているギリシア語は同じ言葉である。そこで今回の訳では見出しもまた「コリント訪問の取りやめ」となっている。

7. ガラテヤの信徒への手紙

2:10 「わたしも」→「このことのためにも」

新翻訳 「ただ、わたしたちが貧しい人たちのことをこれからも顧みるようにとのことでしたが、わたしはまさにこのことのためにも大いに努めてきたのです。」

口語訳 「ただ一つ、わたしたちが貧しい人々をかえりみるようにとのことであつたが、わたしはもとより、この事のためにも大いに努めてきたのである。」

新共同訳 「ただ、わたしたちが貧しい人たちのことを忘れないようにとのことでしたが、これは、ちょうどわたしも心がけてきた点です。」

新改訳 「ただ私たちが貧しい人たちをいつも顧みるようにとのことでしたが、そのことなら私も大いに努めて来たところですよ。」

ギリシア語原文に「も」を表す言葉（カイ）がついている。それを、新共同訳、新改訳は「わたし」に結びつけて「わたしも」と訳している。これに対して口語訳は「このこと」に結びつけて訳している。

ここは、パウロが使徒会議の決定に従い、異邦人伝道と並んでエルサレム教会の「貧しい人たち」を「これからも顧みる」ための献金を集める課題をはたしてきたこと言っているのので、口語訳が基本的に正しい。しかし、口語訳は、その募金活動が今後なされる今後の課題のように訳している。しかし、原文は、これからも続けるようにということで、エルサレム会議と同時にエルサレムへの飢饉に伴う緊急支援がなされたことを今回だけのことにしないように続けてほしいという決定であったことがわかる。この点は、使徒言行録 11:30 に記された飢饉におけるエルサレム支援訪問が、15章のエルサレム会議と実は同時に行われたことを示しているのである。

2:10 はもう一つ重要なことをわれわれに教えてくれる。その手掛かりは人称の変化である。すなわち「わたしたちは」から「わたし」に変わっている。前者の「わたしたち」にはエルサレム教会から使徒会議（と飢饉に伴う援助訪問）のためエルサレムに行ったパウロとバルナバがアンテオケ教会の人たちが含意されている。これに対し、後者では「パウロ」だけが「わたし」として語られる。このことから、この手紙を書いた時点で、パウロはバルナバやアンテオケ教会から別れ単独になったことがわかるのである。周知のようにパウロは第二回伝道旅行の出発に当たってバルナバとアンテオケ教会から袂をわかった。それゆえ、この短い文から、ガラテヤ書は少なくとも、第二回伝道旅行以後に書かれた書物であることがわかるのである。

このように、本節は、短い文を丁寧に観察し、正しく読み解くことの大切さをあらためて知らされる好個の箇所であり、今回の翻訳ではその細かい洞察が正しく訳出されている。

8. テサロニケの信徒への手紙一

2:6-8 「やさしくふるまった」→「幼子のようにになりました」

新翻訳「6 また、あなたがたであれ、他の人であれ、人からの称賛を求めませんでした。

7 私たちはキリストの使徒として重んじられることができたのですが、むしろ、あなたがたの間で幼子のようにになりました。母親が子どもを慈しみ育てるように、 8 あなたがたをいとおしむ思いから、私たちは神の福音だけでなく、自分の命さえ喜んで与えたいと願ったほどです。あなたがたがわたしたちの愛する者となったからです。」

新共同訳 6 また、あなたがたからもほかの人たちからも、人間の誉れを求めませんでした。 7 わたしたちは、キリストの使徒として権威を主張することができたのです。しかし、あなたがたの間で幼子のようにになりました。ちょうど母親がその子供を大事に育てるように、 8 わたしたちはあなたがたをいとおしく思っていたので、神の福音を伝えるばかりでなく、自分の命さえ喜んで与えたいと願ったほどです。あなたがたはわたしたちにとって愛する者となったからです。

口語訳 6 また、わたしたちは、キリストの使徒として重んじられることができたのであるが、あなたがたからもせよ、ほかの人々からもせよ、人間からの榮譽を求めることはしなかった。 7 むしろ、あなたがたの間で、ちょうど母がその子供を育てるように、やさしくふるまった。 8 このように、あなたがたを慕わしく思っていたので、ただ神の福音ばかりではなく、自分のいのちまでもあなたがたに与えたいと願ったほどに、あなたがたを愛したのである

新改訳 6 また、キリストの使徒たちとして権威を主張することもできたのですが、私たちは、あなたがたからも、ほかの人々からも、人からの名譽を受けようとはしませんでした。 7 それどころか、あなたがたの間で、母がその子どもたちを養い育てるように、優しくふるまいました。 8 このようにあなたがたを思う心から、ただ神の福音だけではなく、私たち自身のいのちまでも、喜んであなたがたに与えたいと思ったのです。なぜなら、あなたがたは私たちの愛する者となったからです。

ここで「優しく」「幼子」と訳されているギリシア語は、それぞれ「エーピオス」「ネーピオス」でギリシア文字ニューー文字が単語の前にあるか否かの違いである。ネストレ・アーラント 28 版は、後者を採用する。「優しく」を採用する場合には、「ちょうど母親がその子供を大事に育てるように」という節を、7 節にかかるものとして読む。口語訳、新改訳がそのような訳をとっている。これに対し、「幼子」という本文をとる場合には、この節は、8 節にかかるものとして読むことになり、新共同訳がそのように訳している。

この箇所は、よく観察すると、パウロが、テサロニケの教会の信徒に対して、権威を主張することができたのに、「幼子」になったことがまず言われ、つぎに「母親」、11 節で「父親」になったと言われる。「幼子のような小ささ（マタイ 18:3-4 参照）、「母親」の自己犠牲的ないつくしみ。訓戒をする「父親」というこの順番の妙をパウロはここで述べているのである。それゆえ、新共同訳の読み方が文脈的にも正しい。ちなみに新翻訳では、欄外註に「異」「優しく振る舞った」というエーピオスを取る、口語訳、新改訳の読み方を記している。

9. ヤコブの手紙

1) 2:14…18 「しかし、あなたには信仰があり」→「逆に、あなたには信仰があり」

新翻訳 『私のきょうだいたちよ、「私には信仰がある」と言う者がいても、行いが伴わなければ、何の役に立つでしょうか。そのような信仰が、彼を救うことができるでしょうか。…18 逆に、こう言う者もいるでしょう。「あなたには信仰があり、わたしには行いがある。行いのないあなたの信仰を、わたしに見せてください。そうすれば、わたしもまた、行いによってわたしの信仰をあなたに見せましょう。』

新共同訳 2:14 「わたしの兄弟たち、自分は信仰を持っていると言う者がいても、行いが伴わなければ、何の役に立つでしょうか。そのような信仰が、彼を救うことができるでしょうか。…2:18 しかし、「あなたには信仰があり、わたしには行いがある」と言う人がいるかもしれません。行いの伴わないあなたの信仰を見せなさい。そうすれば、わたしは行いによって、自分の信仰を見せましょう。』

口語訳 2:14 『たしの兄弟たちよ。ある人が自分には信仰があると称していても、もし行いがなかったら、なんの役に立つか。その信仰は彼を救うことができるか。…2:18 しかし、「ある人には信仰があり、またほかの人には行いがある」と言う者があるろう。それなら、行いのないあなたの信仰なるものを見せてほしい。そうしたら、わたしの行いによって信仰を見せてあげよう。』

新改訳 2:14 「私の兄弟たち。だれかが自分には信仰があると云っても、その人に行ないがないなら、何の役に立ちましょう。そのような信仰がその人を救うことができるでしょうか。…2:18 さらに、こう言う人もあるでしょう。「あなたは信仰を持っているが、私は行ないを持っています。行ないのないあなたの信仰を、私に見せてください。私は、行ないによって、私の信仰をあなたに見せてあげます。』

2:14-18 は、著者の議論の筋がたどりにくく、また会話文と地の文との区別も難しい箇所である。18節は「あなたには信仰があり、わたしには行いがある」というのが原文の正しい訳であるが、口語訳はここをごまかして訳している。それは、「あなた」と「わたし」が文脈においてだれを指しているのかを理解することができなかつたためである。

18節は、全体として14節で「わたしには信仰がある」と言いながら、行いが伴わない人に対して、別な人が、「あなたは信仰を持っているが、私は行ないを持っています。行ないのないあなたの信仰を、私に見せてください。私は、行ないによって、私の信仰をあなたに見せてあげます。」と反論しているのであり、その会話は18節の終わりまでと理解するのが妥当である。新共同訳は、「あなたには信仰があり、わたしには行いがある」までを会話、その後の部分を地の文として著者の主張として翻訳してしまつて、意味が通らなくなつている。その点では、新改訳が正しい翻訳をしているが、18節が14節の反論として語られているということが、明確ではない。そこで新翻訳は、「逆に」という言葉を入れて、これが反論であることがはっきりわかるように工夫して訳出した。

2) 3:6 「舌は不義の世界です」→「舌は … 不義の世界を成しています」

新翻訳 「舌もまた火です。舌は、わたしたちの体の器官の中で、不義の世界を成しています。』

新共同訳 『舌は火です。舌は「不義の世界」です。わたしたちの体の器官の一つで、』

口語訳 「舌は火である。不義の世界である。舌は、わたしたちの器官の一つとしてそなえられたものであるが、」

新改訳 「舌は火であり、不義の世界です。舌は私たちの器官の一つですが、」

従来の訳はいずれも、「不義の世界」を、「舌は火である」の「火」に続く、述語として訳してきた。しかし、これは、原文の「成している」と訳した動詞（カシィスタイ）の目的補語として理解するのが相当である。このどちらかなのかをめぐって、ここは解釈の難所となってきたが、今回は新約学の新しい知見によって、後者の意味にとるのが妥当として本文に訳出し、従来の訳は別訳として欄外においた。

因みに、新約聖書学の最新の成果を取り入れて共同書簡において新たな本文の改訂が行われたネストレ・アーラント 28 版において、この箇所も後者の意味に本文が変わった。それは、27 版まで、「火」と「不義の世界」という言葉の間に、コロン（・）が置かれていたが、今回はピリオド（.）になったということである。小さな記号の変化であるが、大きな変化である。

3) 4 : 5-6 「神は ... 霊を、妬むほど愛す」→「霊が、妬みに燃える」

新翻訳 「それともあなたがたは、聖書が空しい言葉を語っていると思うのですか。私たちの内に宿った霊が、妬みに燃えるのです。6 しかし神は、それにまさる恵みを与えてくださいます。そこで聖書はこう語るのです。「神は、高ぶる者を退け へりくだる者に恵みをお与えになる。」

本箇所は、5 節前半で言われる聖書の引用がどれなのか。5 節後半の本文とその意味が文法的に幾通りにも取れることなど、新約聖書で最も解釈の難しいいわゆる解釈の難所として有名な部分である。

以下に、これまでの訳を掲げてみよう。

新共同訳 『それとも、聖書に次のように書かれているのは意味がないと思うのですか。
「神はわたしたちの内に住ませた霊を、ねたむほどに深く愛しておられ、6 もっと豊かな恵みをくださる。」それで、こう書かれています。「神は、高慢な者を敵とし、謙遜な者には恵みをお与えになる。』」

口語訳 『それとも、「神は、わたしたちの内に住ませた霊を、ねたむほどに愛しておられる」と聖書に書いてあるのは、むなしい言葉だと思うのか。6 しかし神は、いや増しに恵みを賜う。であるから、「神は高ぶる者をしりぞけ、へりくだる者に恵みを賜う」とある。』

新改訳 『それとも、「神は、私たちのうちに住ませた御霊を、ねたむほどに慕っておられる。」という聖書のことばが、無意味だと思うのですか。6 しかし、神は、さらに豊かな恵みを与えてくださいます。ですから、こう言われています。「神は、高ぶる者を退け、へりくだる者に恵みをお授けになる。』」

上を見ればわかるように、口語訳と新改訳は、聖書の引用は同じに理解している。さらに新共同訳は、6 節前半まで聖書の引用としている。しかし、これらの聖書の引用箇所は聖書に具体的にはどこにもないのである。そこで、断片のつなぎ合わせか、聖書外の何かからの引用かということになる。

しかし、この聖書の引用は、6 節 b の「神は、高ぶる者を退け へりくだる者に恵みをお与えになる」という箴言 3 : 34 なのである。

また従来、聖書の引用とされてきた（が引用箇所不明の）「神は、私たちのうちに住ませた御霊を、ねたむほどに慕っておられる」は、引用ではなく、地の文であり、しかも異読により、「私たちの内に宿った霊が、妬みに燃えるのです。」と読むことができ、これが全体の文脈に適うのである。なぜなら、手紙の著者は、4 章 1 節で「あなたがたの間にある戦いはどこから、争いはどこから来るのですか。あなたがたの体の中で争い合う欲望から来るので

はありませんか。」と言って、人間の戦い、争いといった悪がどこから来るのかという問題を提起し、それは、わたしたちに宿った霊が妬みに燃えることから来るのであるという人間学的な答えを5節bで与え、しかしそれを解決する神学的な答えを6節aで提出し、その根拠として箴言3:34を引いているからである。またこの読み方は、本箇所本文脈と合致するだけでなく、ヤコブの手紙の全体的な神学思想とも合致する(1:13-15を参照)。新翻訳は、この難解な箇所新しい読み方を提示することによって、本箇所の解釈史において画期的なものとなっている。そこで5節bの従来の訳は、欄外に置かれることになった。

10. ヨハネの手紙三 「一人一人に」→「名を呼んで」

新翻訳 15 「あなたに平和がありますように。友人たちがあなたによろしくと言っています。そちらの友人たちの名を呼んでよろしく伝えてください。」

新共同訳 15c 「そちらの友人一人一人に、よろしく伝えてください。」

口語訳 「そちらの友人たちひとりひとりによろしく言ってください。」

新改訳 「そちらの友人たちひとりひとりによろしく言ってください。」

ヨハネの手紙三は、結びの挨拶を三つのヨハネ的な言い回しで着色している。

15aの「あなたに平和がありますように」は、復活した主イエスの弟子たちに対する挨拶、20:19の「あなたがたに平和があるように」を想起している。

15bの「友人たち」は、イエスが弟子たちを「友」と呼ばれたことに由来する。ヨハネ15:13-14、15の「友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない。

わたしの命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である。

15:15 もはや、わたしはあなたがたを僕とは呼ばない。僕は主人が何をしているか知らないからである。わたしはあなたがたを友と呼ぶ。」

また11:11「私たちの友ラザロが眠っている。わたしは彼を起こしに行く」

わたしたちを友と呼び、友のためにご自身の命を捧げてくださったイエスをここで想起しつつ、ヨハネの教団は互いに友と呼び合うのである。

15cの従来「一人一人に」と訳されてきた言葉「カトノマ」は、その意味にヨハネ的な意味合いが充填されている。すなわち、この言葉はヨハネ福音書10:3の「門番は彼には門を開き、羊はその声に聞き従い、羊飼いは自分の羊の名を呼んで連れ出す」の「名を呼んで」と同じ言葉であって、牧会的、司牧的な言葉なのである。いずれもヨハネ教団が保持したヨハネ福音書のイエス伝承に由来し、彼らが大事にしていたものである。それゆえ、今回の訳では、「友人たちの名を呼んで」という訳を行った。ヨハネの手紙三は新約聖書正典でもつとも短く、影が薄い書物であるが、ここに明確にヨハネ神学、ヨハネ教団の刻印が見られることを忘れないようにしたい。

11. ヨハネの黙示録

1) 1:15 「しんちゅう」→「青銅」

新翻訳 「足は燃えている炉から注ぎ出される青銅のようであり」

新共同訳 「足は、炉で精練されたしんちゅうのように輝き」

口語訳 「その足は、炉で精練されて光り輝くしんちゅうのようであり」

新改訳 「その足は、炉で精練されて光り輝くしんちゅうのようであり」

下線部を引いた部分は、原文では、一つの単語（カルコリバノー）、しかも、それは全ギリシア語でここ（2：18 に繰り返される）しか発見されていない単語である。しかもこの文は壊れており、新約聖書における解釈の難所中の難所である。そこで異読によって、文を修復して翻訳した。ところで、従来の訳は「しんちゅう」と訳しているが、これは青銅でなければならない。カルコリバノーの「カルコ」は銅を意味している。しんちゅう（黄銅）は、銅と亜鉛の合金である。これに対し、青銅は銅と錫の合金であって、人類が鉄を溶融できるようになるまで、何千年もの間、青銅器文明であった。新約時代も青銅器文明に属するのである。従って、金属学、冶金学的にも青銅が正しい（別訳として欄外に「しんちゅう」と置いた）。

2) 5:6 「間、、、間」→「間」

新翻訳 「さらに私は、玉座およびそれを囲む四つの生き物と、長老たちとの間に、小羊が屠られたような姿で立っているのを見た。」

新共同訳 「わたしはまた、玉座と四つの生き物の間、長老たちの間に、屠られたような小羊が立っているのを見た。」

口語訳 「わたしはまた、御座と四つの生き物との間、長老たちの間に、ほふられたとみえる小羊が立っているのを見た。」

新改訳 「さらに私は、御座——そこには、四つの生き物がいる。——と、長老たちとの間に、ほふられたと見える小羊が立っているのを見た。」

原文では「間」という言葉（エン・メソー）が二度繰り返される。それで、口語訳、新共同訳は、それをそのまま訳している。これでは、小羊がどこに立っているのかがはっきりしなくなる。実は、黙示録の著者は、セム語（ヘブライ語）の影響の強いギリシア語を使う人であることがわかっている。ヘブライ語では「間」という前置詞（ベイン）を二度繰り返して表す（例 創世記 16：14）。つまり、「ベイン A ベイン B」で「A と B の間」となる。口語訳、新共同訳は、その言語学的認識がないため、「間」を二回、そのまま訳してしまったのである。そこで、小羊は、玉座と四つの生き物、それと長老たちの間に立っていることになる。新改訳が、正しく訳している。今回の聖書翻訳では、口語訳、新共同訳に対して、正確な訳になった。

終りに

この7年間、まさに時間とエネルギーを注いで聖書のギリシア語の日本語への翻訳に取り組んできて、今はこの事業を自分にとってライフワークのように感じ、参加させていただいたことを感謝している。またこの事業がなければけっして出会うことのなかった日本聖書協会の職員の方々を始め多くの主にある兄弟姉妹の方々と豊かな親交が与えられたこともかけがえのない、えがたい、忘れがたい財産となったことを感謝している。

かぎりある命とときを惜しみつけふも机にみふみを訳す
ご静聴ありがとうございました。